
私達は立ち向かう、あの世界を求めて

一ノ瀬光陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私達は立ち向かう、あの世界を求めて

【Nコード】

N1449K

【作者名】

一ノ瀬光陽

【あらすじ】

世界は平和だった。穏やかで緩やかな刻が流れていた。主人公であるクロは、それがずっと、それこそ永遠に続くかのように思われていた。

だがクロが一人の少女と出会ったことで、世界は激変した。希望に満ち溢れた世界は絶望に染まり、闇に包まれていく……。

クロは死の淵で、一体何を思うのだろうか……。

暗闇——後悔の中で——

闇に閉ざされた世界に、私はただ一人存在していた。

いや、存在していたというのは少し違うかもしれない。なぜなら自分の身体がないのだから。闇に包まれた身体は視認することさえ叶わず、他の五感も機能していなかった。例えるならば意識だけが宙に浮いている感じだ。

ここは……？

何度も繰り返した疑問。しばらく思考し、そして理解する。また駄目だったのだと。

諦めにもいた絶望感が私のここを支配する。もう慣れたはずだった。けれどやり直す度に期待が、希望が生まれ、今度こそはと甘い夢にすがりつく。

そして思い知らされるのだ。また乗り越えられなかったと。私に待つのは この暗い世界だけだと……。

どれ程の時が経ったのだろう。私はただ暗闇の中でひたすら思考していた。この漆黒の前では、それくらいしかすることはないのだ。前回、私は十分に闘うことができた。どんな敵が来ようと臆さず、向かっていった。その前にはいなかった、新たな仲間も力を貸してくれた。なのに私はここにいます。それは私の力が及ばなかったことを意味している。

だが何故だ。私は全力を尽くした！ 抗えぬはずの運命を変え、今度こそ勝利を得たはずだった！ なのに何故……！

それは本当に全力だったの？

ふと、私の心で囁く声があった。

貴方は全てをやり尽くして、本当にもう無理だと感じたの？ まだやり残したことがあったんじゃないの？ 後悔してるんが、あるんじゃないの？

後悔……。確かにそうだ。自分は全てをやった。いや、やったと思っ込んでいた。だが違うんだ。私はあの時、後悔した。辛くて、悔しくて、泣いて……。あの最後の瞬間に後悔したんだ。

だからここにいる。この絶望の世界に。自分の闇に囚われている。私はやり直したい。次こそは悔やまないように。最善と呼ぶにふさわしい世界にするために！

そして世界に光が満ちる。絶望に囚われていた私の心に。

それはほんの僅かな、小さな願い。それは……。

二人——医者と患者——

……身体が、熱い……。

意識が戻った瞬間、私の身体を熱が襲う。なんだろう、この感覚は。火傷したみたいに熱くて、苦しい。

「うつ、ぐううう……！」

次いで来たのは激痛。全身を切り裂かれるようなそれに、私は思わず呻き声をあげる。情けない。たかが痛みの所為で動けない自分が。何もできず、ただ耐えるだけの自分が。

その時、右側から物音がした。錆びたドアを開ける、あの耳障りな音。目を向けると、そこには少し背の高い男がいた。年は二十代後半といったところか。

「おや、もう目が覚めたんですね」

男は嬉しそうに話しかけてくる。

「心配だったんですよ。運び込まれてきた時にはもう無理だと思いましたね。なにせ右肩から腰にかけての深い裂傷。出血多量、右腕と左足の開放骨折。更には全身打撲と、助かる要素など何一つありませんでしたからね」

男はやたら早口で私の状態を説明してきた。ほとんど聞き取れなかったが、最後の一文はなんとか理解できた。

「なら……私は、すでに……に……死んで、いる……と?。」

とても弱々しい声。だがそれが私に出せる精一杯のものだった。
一瞬男はきよとしたがすぐに微笑んだ。

「いえ、貴方は生きています。あの絶望的な状態から、奇跡的に持ち直したんですよ。驚く程の回復力ですね」

男は楽しそうに話す。今すぐそのよく喋る口を潰したかったが、今は動くことさえ億劫だった。しばらく聞くしかないようだ。

「ここは……どこら、辺……だ？」

「ここは貴方が倒れていた国境から、だいたい一キロ程離れた村、ウェスターと言います」

一キロ……思っていたより近いな……。

「わ、たし……は、どれく、らい……寝て、いた……」

「？　そうですね……だいたい二日といったところでしょうか」

それを聞いて私は焦る。すでにあの日から三日が経っている。すぐ傍に追手がいてもおかしくない。寧ろ私が見つかっていないことの方が不思議だ。

「そう、か……世話に、なった……」

私は思っように動かない身体に鞭を打ち、無理矢理立ち上がる。足元が覚束ないが、そんなこと気にしてられない。

「ちょっと待って下さい！ 貴方はまだ傷も癒えていないんですよ！？ 生きているのだって奇跡なのに……！」

「そんなこと、分かって、いる……！」
だが忙なければ！ あいつが来る前に……！ 彼を、この村を巻き込む前に……！」

その時、ふと身体が浮遊感に包まれた。なんとか振り返ると、男が一本の注射器を手に行っているのが見えた。
そして私の意識はゆっくりと落ちていった……。

「ふう……」

少女が眠りに落ちたのを確認し、男は軽く溜め息をついた。

——やっと眠ったのか——

突然姿なき声だが、男の脳に直接響く。別段驚くでもなく、頭の中で返事をするそれが男のごく普通なのであった。

——ああ……。もう少し大人しくしてくれればいいんだが……——

——それは無理だろうぜエ……。おそらくこいつは訳ありだア——

考える。この名も知らぬ少女は国境付近に倒れていた。身体には深い裂傷が刻まれ、今も何かから逃げようとしている。そこから導き出される答えは……。

——この少女は追われていた？——

——それも厄介なやつになア。国境ってこたア隣国『ドリミア』か

ら来た可能性が高い。傷はどちらか分かんねエが、どっちにしろ敵対関係にあるってエことだ――

こいつが言うことにも一理ある。もしかしたらただ遊んでいて、崖から落ちただけとも思ったが、さっきの行動には結びつかない。やはり逃げてきたというのが妥当だろう。

――でも困っている人を見捨てられない――

それは自分が医者であるが故か。私はこの少女に対し、すでに義務感のようなものを感じていた。自分が受け持ったのだから、このまま放り出す訳にもいかない。それにこの村の外は魔物が棲む樹海が広がっている。この状態なら、一日も持たずに死ぬだろう。

――お前も大変だなア？ そんなプライドなんか捨てちまえばいいのに――

からかうように声が笑う。しかし私はそれを黙殺し、少女をベッドへと移す。

――お前はそんなお人好しじゃあないだろ？ なあクロス……――
再び目覚めると、身を焦がす痛みが幾分ましになっていた。私はなんとか身体を起こす。

「おや、もう目が覚めたんですね」

近くに来た男が、また同じ台詞を吐いた。その顔にはやはり微笑。……。私の為にやってくれたことは分かるが、何故かイライラする。特にその顔。少し大人びていて、でも子供のような笑顔はいいと思う。だがもう少しやり方を考えてほしい。こっちはこれでも女なのだから。

「どうしたんです？ そんな怖い顔をして。せつかくの可愛い顔が台無しですよ」

私は「なんでもない」と軽く返した。

「私はどのくらい寝ていた？」

前とは違い、今度ははつきりと喋ることができた。

「二日です。その間貴方が恐れるような人達は誰一人来ませんでしたよ」

こいつ、どこまで……！

もしかしてこいつは私のことを知っているのではないだろうか。全てを知った上で私を助けてくれたのではないか。そんな根拠もない妄想をし、思わず心の中で笑ってしまった。そんなはずはないと、私が良く知っているのに。

「で、何があつたのですか？ 貴方の怪我は、ただ崖から落ちただけとは思えない。傷の深さや形からいって、誰かに襲われたんじゃないですか？」

男は思っていたことを素直に口にした。少女の驚いた顔が、それを事実だと雄弁に語っている。

「……。すまない、今は話すことができない……」

そう、今はまだ話すことはできない。今ここで話してしまったら、

関係のない人々をも巻き込むことになる。それだけは絶対に避けなくてはならなかった。

「……。まあいいでしょう。また話したくなったら言って下さい。……できれば早く頼みます。何も知らないまま死ぬのは誰でも嫌ですからね」

「……すまない」

「いいんですよ。幸いここは人目に付きにくい村です。決心がつくまでゆっくりしていくといいでしょう」

そう告げると、男はドアの方へと歩いていった。私はそれと呼び止める。

「あの……！」

「はい？　なんでしょう」

「私はムウといいます。貴方の名前を覚えてもらってもいいですか？」

「そうですね、自己紹介がまだでした。私はクロスと申します。これからよろしくお願いしますね」

男は、クロスは優しく微笑んだ。これが私とクロスの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449k/>

私達は立ち向かう、あの世界を求めて

2010年10月28日04時54分発行